國學院大學学術情報リポジトリ

Orikuchi Shinobu and Kyodo-Kenkyukai(local studies group)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, しおり メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001990

折口信夫と郷土研究会

齋藤　しおり

要旨

柳田國男が新渡戸稲造と「郷土会」を結成したのは明治四十三年の時分である。折口がこの「郷土会」に足を踏み入れるのは、それから五年後の大正二年頃で同年には、雑誌『郷土研究』に「髭籠の話」を発表する。この「郷土会」や『郷土研究』との出会いが折口の研究人生に大きく影響を及ぼし、大正五年には自身で國學院大學内に「郷土研究会」を創立することとなる。本稿では、折口信夫が創立した郷土研究会について活動記録等の一覧を作成し、その活動内容を考察した。その結果、郷土研究会は、講義・講演などで培った知識を、研究会などでの調査・見学・実演などで実践的に体感させ学ばせる実践教育の場であった。さらに、実演という形で地方の芸能を東京に呼びよせることで、その芸能がもつ意味を広く世間に知らせる場であったことが指摘できる。

キーワード
郷土、教育

はじめに

柳田國男は、明治四十二（一九一二）年に『後狩詞記』、明治四十三（一九一三）年に『石神問答』、『遠野物語』を出版し、同年十二月には、新渡戸稲造や石黒忠篤らと「郷土会」を結成する。折口信夫が國學院大學を卒業するのはその翌年、明治四十三（一九一三）年の七月である。

柳田國男の「郷土会」結成は、宮崎県椎葉村での見聞や佐々木喜善からの遠野の伝承の聞書きなどと無関係ではなく、むしろ中央から離れた岩手県や宮崎県における、人々の生活実態を目の当たりにし、伝承世界を具体的に耳にすることで、文明化が急速に進む東京との差異を実感したことによるだろう。海外から文化を持ち込まれ、それを受容していく日本の、ともすればどこかいびつな姿に何を感じ取ったかは重要な問題であるが、柳田にとっては新渡戸が提唱する「地方学」と響きあうものがあったことは確かである。

時に、明治三十年代からはドイツのペスタロッチが提唱する直観主義教育の理念による郷土教育運動が高まりつつあり、この両者が柳田の中でつながり、大正二（一九一三）年には雑誌『郷土研究』の発刊にいたる。

自らの学問の方向性が見えず、悶々と思い悩む中で折口が出会ったのが、この『郷土研究』であった。柳田が同誌に次々と発表する論考や南方熊楠から寄せられる紀州や世界各地の習俗に目を開いて行くのである。その経緯や思いは『古代研究』民俗学篇二の巻末の「追い書き」に述べられている。つまり、後に言う民俗学という学問を知り、自らの身をこの研究の中に投じていくのであり、その具体的行動として大正五（一九一六）年に國學院大學内に郷土研究会を設立する。自らの初期の学問形成の支えとなった『郷土研究』は、大正六（一九一七）年三月に休刊となるが、折口はこの休刊を受け、大正七（一九一八）年八月には『土俗と伝説』を編集、刊行するのである。

本稿では、こうして設立された郷土研究会の活動を整理し、折口のこの会に寄せる思いを検討する。

一　國學院大學郷土研究会の概要

國學院大學に郷土研究会が誕生したのは、「自撰年譜1」[1]の大正五年の項によれば、

　此年、國學院大學郷土研究会を創立する

「自撰年譜2」[2]では、

　此年、郷土研究会を創立。

とあり、大正五（一九一六）年の設立が確認できる。主だった活動記録は見当たらないが、「郷土研究会略史」[3]には次のようにある。

　郷土研究会の起りは、大正五年、折口信夫先生の丁度三十歳の時であつた。再度の上京にお伴して来た竹原光造氏が、國學院の学生となつて間もない頃である。翌六年には牛島軍平氏、水木直箭氏、杉本舜市氏、香月大西氏などが入学されてゐるから、会の活動も活発に展開した。

しかし、「発足当時の模様を知らせていたゞく用意が不十分な為に一番大切な点を省略するのは、残念なことだ」ともいい、発足当時の活動の様子が不明瞭であることも述べている。

　郷土研究会が國學院に作られた後、大正七（一九一八）年八月には雑誌『土俗と伝説』が発刊されている。この雑誌は、前述のように大正七（一九一八）年に休刊となった雑誌『郷土研究』を復興する意気込みで発刊されたもので、手伝いには牛島軍平・水木直箭の名前が見える。『郷土研究』と『土俗と伝説』を対比して見ていくと、双方とも巻末欄に、同誌に掲載したい記事について告知している。『郷土研究』（郷土研究社／大正三（一九一四）年）には、

　○村々に於て、現に行はるゝ珍しき年中行事　○農業　林業商工業動植鉱物採取等関する特色ある慣業又は之に伴ふ儀式　○一族一郷又は部落間の交際往来に関する昔からの作法　○生死・婚姻其他重大な人事に伴ふ現在の風習　○忌み嫌ひと称して人のせぬ事及び其理由　○まじなひと名けて祈祷以外に災害を避くる手段　○大小の神様仏様に対する信仰と其祭り　祈祷願掛け　お礼参りの有様　○妖怪など、言ひて神仏以外に　人の怖るゝ物の種類名称　○村に昔あつた事として老人などのする話　○山川淵谷森塚古木巌石城跡屋敷跡乃至は鳥獣草木其他の天然物に関する言ひ伝へ　○物の名などの珍しきもの　○昔からある土地の唄の類なり

『郷土研究』に対して、『土俗と伝説』（牛島軍平編／文武堂／大正七（一九一八）年）では、

　○村々に行はれて居り、又は何年前から行はれなくなつたといふ年中行事○農業・林業・商工業・動・植・鉱物採り出しに関した特色あるしきたり、又其に伴ふ儀式○一族・一郷又は部落々々の交際・往来に関した昔からの作法○生死・婚姻其他重大な人事に伴ふ風習○忌み嫌ひなど称へて人のせぬ事及びその訣○災害を避けるまじなひ・民間療法○民家建築史上の参考になる事柄○大小の神仏に対する信仰と其祭り、祈祷・願掛・礼詣り・願ほどきなどの容子○妖怪の種類・名称・伝説・其形○山・川・淵・谷・森・塚・古木・巌石・城址・屋敷址から、鳥獣・草木其外天然物に関した言ひ伝へ○諸職人の使ふ道具の種類・名称○珍しい物の名○其村に昔あつたこと、して老人などのする話○昔からある土地の唄○方言　（傍線は引用者による）

とある。『土俗と伝説』では新たに建築、職人の道具、方言の項目が増えているだけで、読者に求めた採集項目はほぼ同じ内容である。この点からも『土俗と伝説』は『郷土研究』を受ける形で発刊されたことが分かる。また、同じ内容の項目であっても、老人のする話のように順番が異なっていたり、神仏の信仰の項目に「願ほどき」が増えていたりと折口独自のアレンジも見える。しかしこの雑誌も、「編集の労に堪へられなかつたため」四号で廃刊となる。森本平は、後に『古代研究』に収録されることになる論文が、多くこの雑誌に執筆されたことから、雑誌としての重要性の高さを指摘している。[4]

郷土研究会は設立後、一時、低調になったようであるが、大正八（一九一九）年に、折口が國學院師範部専任教員となった後、「蘇生会」として再生を遂げる。「郷土研究会略史」によれば、会員として、大正七（一九一八）年に坪井直彦、渾大防小平、土佐林寛、大場磐雄などが、大正八（一九一九）年には今泉忠義、穂積忠、三上永人などが加わったようである。第一回目の活動は、大正八（一九一九）年十月二十五日の土曜日に行われた。「郷土研究会略史」によれば、この時は、中山太郎の「養子の話」、折口信夫の「歴史と民譚との境目」、金田一京助の「アイヌの伝説」、大場磐雄（当時は谷川姓）の挨拶となっている。水木直箭の回想「郷土研究会蘇生会前後」[5]では、中山太郎の「神代に於ける養子の土俗」、折口信夫の「民譚と歴史との境目（一）」の講演、大場磐雄の「採集報告」となっており、若干の差異が認められる。

この郷土研究会とは、どのような目的で設立されたのであろうか。折口は、昭和三（一九二八）年の上代文化研究会講演筆記「上代文化研究法について」[6]の中で

我國學院大學はその目的上、当然古代学に基礎を置く可きものであつて、奈良朝・平安朝以降をその研究対象とする国語・国文学の如きは、むしろその補助学科の一つでなければならないのであるが、現今では国学のための国学の本質が転換して、国文学の方がその首位を占めたが如き形に誤られて居る。故に、もし、古代学・古代研究を否定する様な者があるとすれば、それは決して國學院大學の学生であるとは云ふ事の出来ない者である。

この古代研究をその使命とする國學院大學に、現今二つの古代研究会を見る事が出来る。一は上代文化研究会、他は郷土研究会である。前者は主として具体的な物を対象として物質文化を、後者は精神文化を究めるのがその目的であつて、両者は物質的精神的と云ふ区別を持つて居るもので、今日まで何等の衝突も無く円満な喜ばしい発達を遂げて来て居るのである。

というように、古代学に研究の基礎を置く國學院大學の中で、郷土研究会は、上代文化研究会と並んで古代学研究を使命とする研究会であって、上代文化は物質文化を、郷土研究会は精神文化を研究対象としていたことがわかる。郷土研究会は、折口にとって古代の精神文化を究める目的で作られたといえるだろう。

また、学内での位置づけについては、「郷土研究会略史」に「郷土研究会は國學院内にあるが、経営の上では学友会にも属さない独自の歴史を持つ会で会費も集めないし、何の収入もない」とある。そのため、「郷土研究会略史」によれば、芸能の実演会などの時は出演者への土産や接待などの費用を補う手段として帽子が回されたことがあったという。

では、学生にとってどのようなものであったのか。郷土研究会に所属していた永田東一郎は『回想の折口信夫』[7]のなかで、「柳田國男先生や折口信夫先生等によって開かれた民俗学を研究したり、指導して頂く会で、國學院大學の特色の一つと信じていた。」と述べており、民俗学を自身で研究し、また指導を受ける場でもあったとしている。

二　郷土研究会の活動

実際に、郷土研究会の活動とはどのようなものであったのだろうか。年譜から郷土研究会に関連した記録を拾い、「表1　郷土研究会等活動記録」を作成した。表から、郷土研究会の活動は大きく分けて、講演・夜話会・講義・見学・実演の五つに分類が出来る。以下、順に見て行きたい。

1　講演

まず、講演は、「郷土研究会略史」によれば、

年二回から三回の公開講演があり、芸能公開の時は折口だけだが、年二

回乃至三回の公開講演がある。芸能公開の時は、先生の講話だけであるが、定期の大会は金田一先生・中山太郎氏のお三方がお揃ひになる

とある。講演会は、芸能公開時は36「雛祭りについて」や37「田遊び祭りの概念及びその解説」のように折口の講演のみだが、そうでない時は、金田一や柳田なども話をしている。たとえば、「蘇生会」開始当時の大正八（一九一九）年十月は折口信夫の2「歴史と民潭の境目」を始め、金田一京助の「アイヌの伝説」が行われ、翌十一月には折口の講演を続ける形で今度は金田一が「歴史と民潭の境目」を講演している。翌九年には7「山のとね里のとねの話」（金田一京助）、8「日本文学を通じて見たる文化の展開」（土居光知）、9・10「フォクロアの範囲」（柳田國男）などが行われ、表からは折口も含めて約三十回以上の講演が確認できる。

大正期から昭和期を通じて講演者は折口が最も多いが、民俗学の柳田國男、アイヌ研究の金田一京助、『文学序説』で有名な文学研究の土居光知などというように、当時の学問の先端にいた人々が登場し、講演の内容は幅広いものであったことがわかる。

また、大正十二（一九二三）年十一月十七日にはジュネーブから帰国直後の柳田を迎えて講演が行われており、このことは「郷土研究会の想ひ出」で柳田自身によって述べられている。[8] 渡欧先で興味を持った西洋の紋様について資料となる写真を買い集め、半年位の考案で発表した旨が記されており、講演とはこのように研究者の新鮮な研究成果をいち早く耳にすることが出来る場でもあった。

2　夜話会

夜話会は「郷土研究会略史」には、

講義は、毎週先生の出校日の放課後開かれ、随時夜話会を催して会員の採集報告が行はれる。

とある。夜話会とは講義の後で、採集報告でいえば、4の渾防大小平、6の杉本舜市、講演とセットになったものは、5「薮入りの話」と牛島・水木による採集報告、7の金田一京助「山のとね里のとねの話」の講演と、大場磐雄の座敷わらし、細川清の阿波国の採集報告がある。「郷土研究会略史」では、ほかに穂積忠の「道祖神」、昭和四（一九二九）年に小泉鉄の「蛮社並び蛮人」、昭和九（一九三四）年に氷室照長の「鵜祭」などの採集報告もあがっている。また、夜話会では会員による見学した祭りの実演も行なわれた。

昭和三年今泉君（＝今泉忠義）と西角井（＝西角井正慶）と、はじめて花祭見学にお伴したが、帰つて早速鬼踊りを実演した覚えもある。

というように、昭和三（一九二八）年一月三州北設楽郡金越で行われた花祭り見学に何人かの会員が随行し、見学したのである。これについては、永田東一郎も「郷土研究会」の回想の中で

ある年には、先生が何人か連れて奥三河の花祭りを調査に行かれたが、その後の郷土研究会で花祭りの状況を再現して見せられた。こういう時の先生は実に真剣で、「へんばい」をしている同僚の足つきを指さして、「ここが違う。」「そこはこういう風であった。」といちいち訂正したり、確かめては楽しんでおられた。だから、まだテレビが無い時であったが、私たち行けなかった者にも、鬼や花の有様がよく頭に入って、みんなで「へんばい」をして花祭の雰囲気にひたったこともある。

という。実演についてはこのほか、アイヌの一団による祭祀や歌、台湾蛮族、大宮の万作一座など、小規模のわりにバラエティに富んだものだったようである。

3　講義

講義は「郷土研究会略史」によれば、昭和元（一九二六）年から昭和十（一九三五）年くらいまでは、毎週折口の出校日の放課後に開かれていたようである。参加者も卒業者や外来者も交じり、五十名を越す盛況であったといい、学内外問わず広く開かれた研究会であったことがわかる。講義内容について

は、

講義は年度によつて概論的に、また各論的に進められ、或は年中行事の時季に応じてなさることもあり、柳田先生の例へば「日本の伝説」が出ると、其をテキストとして「行逢坂」・「たもと石」と一回づつ解説があつた。また「鶯の話」・「太刀の話」・「ふすまの話」といふやうな特殊の話題を選ばれたこともある。

というような内容であった。大正九（一九二〇）年から十（一九二一）年にかけて行われた12～15「民間伝承学」、49～51「民俗学概論」、81、84、145のように三回も行われた「民俗学入門」など、民俗学に関する概論的なものから、「勿論御旅行の都度採訪を主としたお話もあるし」と今泉たちが言うように、見学調査などを踏まえた講義もあった。昭和十一（一九三六）年一月三十日の124「久高島の婚姻及び葬制」125「国頭地方のカミアシャゲ・ノロその他の神人」は明らかにその直前まで行っていた第三回沖縄採訪（昭和十年十二月二十五日～昭和十一年一月二十六日）の採訪報告が絡められたと考えられるし、昭和十四（一九三九）年一月十九日の180「さえの神の話」、同月二十六日の181「石の信仰とさえの神と」は、それ以前の昭和十四（一九三九）年一月十四日の伊豆の道祖神祭りを踏まえ、池田弥三郎と加藤守雄が撮影した伊豆の道祖神の解説をした講義と考えられる。また、採訪方法を習得させるような講義もあった。73「採訪目安の解釈」、85「民間行事伝承採訪要目解説」などである。

表2の「民間伝承蒐集事項目安」は、大正十一（一九二二）年に啓明会に提出し、昭和六（一九三一）年一月発行の雑誌『民俗学』三巻一号に再度掲載したものを元に作ったものである。旧全集の解題[9]によれば、提出後もしばしば書き改め、休暇で帰省する学生のために郷土研究会内において説明後頒布し、採訪目安とした何種かある内の一つであるとされる。簡単に見ていくと、採訪項目の一番初めに信仰の項がきており、中項目が八項目、小項目が七十三項目とかなり細分化されていることがわかる。ここから信仰の事項蒐集にかなりの注意を払っていたことがわかり、折口が民俗学という学問の何に重点を置いていたのかが示されたものであるといえよう。また、後半部分を見ると、民謡・民間芸術、童謡、舞踊、演劇と芸能で、巡業手工業職人など芸能関係で五つの採訪項目の半分の大項目を設けている。ここにはその他の項目に比べて細かく具体的な定義が書かれ、芸能への関心が高かったことがわかる。

その他の講義を、年度を追ってみていくと、昭和十（一九三五）年は「民俗学序説」から心意伝承、十一（一九三六）年は「礼儀」「義理」など道徳の問題、十二（一九三七）年は「民俗学総論」「民俗学入門」など概説を踏まえてから「冠婚葬祭の話」「結婚と婚礼と」、「憎悪の話」、「嫉みの話」などの心意伝承を講義している。昭和十三（一九三八）年は「行事伝承の話」「節分と鬼と」などの周期伝承から「民族芸術」など芸能伝承へ移行する。昭和十四年（一九三九）は「刀の話」「枕の話」などの造形伝承から、「産神、箒神」「うまれきよまり」など産育習俗の語彙を、十五（一九四〇）年は「門と垣」など造形伝承を再び講義し、年譜にはないが、「郷土研究会略史」によれば他にも歳時習俗の語彙をテキストとして「神無月」、「亥子」、「椿」などの講義を行っていたようである。

昭和十五（一九四〇）年には学部に民俗学の講座が新設されたことにより、講義の概論的方面は学部の講座で、各論的な方面を研究会で講義していたようである。そして、年譜では昭和十六年の「民俗学の目的」を最後に講義の記述は見られないが「郷土研究会略史」では、昭和十六（一九四一）年は、「民謡特に労働歌について」、「婚礼の話」、「海部の話」などが行われたとある。また、昭和十七（一九四二）年は同年に発刊された『日本民俗学入門』（関敬吾・柳田國男著　東洋堂　一九四七年）をテキストとして、分類の問題から講話が始まったが、太平洋戦争の影響で中断し、終戦翌年の昭和二十一（一九四六）年に再開されるに至ったとある。昭和二十一（一九四六）年～二十四（一九四九）年にかけての講義は井之口章次の「郷土研究会（郷土会）」[10]

に記録が残っている。井之口の記録によれば、「郷土研究会略史」同様に昭和二十一（一九四六）～二十二（一九四七）年はテキストに『日本民俗学入門』と『日本の伝説』を、昭和二十三（一九四八）年は『日本昔話名彙』（日本放送出版協会編　一九四八年）を用いて講義が行われたようである。講義内容は昔話や伝説を中心に、村や食物、労働などに関する講義そして適宜産育習俗や道徳の問題など戦前講義されたテーマも改めて行われている。また、昭和二十二（一九四七）年には後に論文「女の香炉」の元になった「沖縄の女性」の講義も二回行われている。

4　見学

見学は、昭和十（一九三五）年五月に比企郡松山菅谷方面へ遠足し、北向天神や吉見百穴など史跡の見学のほか、28の昭和二（一九二七）年二月の遠州周智郡水窪町西浦の田楽、29の同年三月の三州北設楽郡豊根村金越の花祭り、同じく五月の30の大山阿夫利神社の大山能、浅草三社祭りの田楽など芸能見学が多く行われ、昭和四年暮れには40のように埼玉県大宮の西角井正慶宅で潤戸村の「三番叟」「万作芝居」「でろれん祭文」などの実演見学会も開かれた。また、見学は一度ではなく、28・32・41の西浦田楽、29・31の金越の花祭りのように、数度訪れるものもあった。

また、見学旅行の本格的なものとして、45の昭和五（一九三〇）年十月の信州新野採訪調査があげられる。年譜を見ると、同年の五月三日に郷土研究会で信州新野の雪祭りを呼んで実演を行ったことがわかる。この五ヵ月後に慶應大学・國學院大學の学生を伴い本格的な採集旅行を行った。

日程は、松本博明の調査報告ノートの翻刻によれば、十月十一日から十八日の八日間であった。「郷土研究会略史」及び松本博明の「長野県下伊那郡旦開村新野村村落調査ノート」[11]から判る参加者と調査項目は以下の通りである。

【國學院】西角井正慶（神楽・芸能祭祀）、青池竹次（職業及び職人調べ）、道田忠雄（被官について）、村田正言（地理・歴史／記録成書）、白石宗夫（農具呪物）、高崎英雄（伝説童話）、小池元男（方言民謡）北野博美（雪祭り・冠婚葬祭・盆踊りその他）

【慶應】佐藤信彦（年中行事）、波多郁太郎、深見吉之助（農具農事）、香川景松（衣食）、牧眞（玩具・童戯）、多賀善次郎

この採集旅行は、昭和五（一九三〇）年三月に『民俗芸術』三巻五号に掲載された「信州新野の雪祭り」[12]から、雪祭りなどの神事芸能の伝承地である新野だけの村落調査を行い、詳細な調査報告を作成する目的があったことがわかる。また、翻刻された調査ノートの内容からもこのことがわかる。

小川直之は、なぜこの年代にこうした村落調査が計画されたのかを問題とし、調査が計画された昭和五年の春先という時期は、昭和五（一九三〇）年三月の『民俗芸術』三巻三号の「花祭り研究」の特集や昭和五年三月の早川孝太郎の大著『花祭』の刊行など花祭り研究の熱を受け、次は「雪祭り」の研究であるという気運が高まり、また折口自身も昭和四（一九二九）年、昭和五（一九三〇）年の『古代研究』三巻本の出版や、歌集『春のことぶれ』の刊行など研究や創作活動に充実した日々を過ごし、加えて折口の、新野での人間関係や、ほぼ毎年足を運ぶほどの祭りへの関心、そして何度も同じ調査地に赴き研究を深めていく折口の研究姿勢などを踏まえると当然のことであろうと指摘している。[13]

5　実演

芸能の実演は、35の昭和三（一九二八）年十月の三州北設楽郡豊根村山内の花祭りから、37の昭和四（一九二九）年六月の東京府豊島郡赤塚村下赤塚諏訪神社の田遊び、42の昭和五（一九三〇）年四月の三州御薗村足込の花祭

り、そして209の昭和二十七（一九五二）年の信州新野雪祭りまで、主催共催、他機関である民俗協会のものも含めれば十五回以上行っている。他機関と言っても、民俗協会は折口が関わっている組織であり、「郷土研究会略史」によると

昭和九年には民俗協会が出来て先生が中心となられ北野博美氏が幹事だつたので、自然吾々も縁故が深く、昭和十年十月その第一回民俗芸能大会が日比谷の公会堂で催された時には、郷土研究会の学生も準備やら整理やらに手伝ひ、「金砂田楽」の猿役を買つて出て、実感を得るに役立つたこともある。

というように郷土研究会の学生も関わりをもっていた。

また、35の昭和三（一九二八）年の三州北設楽郡豊根村山内の花祭りが郷土研究会で実演された経緯については、

昭和三年には愛知県北設楽郡豊根村山内の「花祭」を呼んだ。日本青年館の郷土舞踊大会は大正十四年から始まつてゐるが、何分にも時間は少いし、花祭の如き神事要素の豊かなものは実演がむづかしい。昭和のはじめ屢々花祭の村を訪ねられた先生は、学生を見学に連れて行かれたこともあるが、郷土研究会の大会に呼ばれて学界に紹介なされたのである。

というように、日本青年館で大正十四（一九二五）年から始まっていた郷土舞踊大会では、演じる時間が少なくまた神事要素の豊かなものとして実演が困難であったため、郷土研究会の大会で実演が行われたことが分かる。郷土研究会で実演するということは、時間を取って観察する機会を設けるためであったことが推測できよう。そして、観察と同時にそれはまた地方に埋もれていた芸能を学界に紹介する意図もあった。

昭和四（一九二九）年六月の下赤塚の田遊びは、旧正月十三日の夜間に行われるため、見学はできても調査は困難であり、また祭儀の内容は非公開であるため関係者に聞き取りもできないような状況下で行われていたのである。そのため、「得難き機会と、此由を会員諸氏に通知し、短時間ではあつたが、出来るだけの採取を試みた」[14]のである。足りない箇所を郷土研究会の実演において補足調査をし、『民俗芸術』に掲載した。「この時に採られた記録は、田遊びで用いられる道具から詞章、所作に至るまで詳細なもので、その後の研究は、これを参照している」と新井恒易も指摘している[15]。この下赤塚の田遊び実演が学界に及ぼした影響は、國學院大學伝統文化リサーチセンターPD研究員大東敬明も指摘している[16]。

「郷土研究会略史」によれば、昭和五（一九三〇）年四月の民俗芸術の会と共同主催で行われた西浦田楽の実演も、郷土芸能大会よりも詳しく観覧させる意図で行われ、折口が解説を加えている。これも下赤塚の芸能公開と同じ例であろう。先も述べたが、昭和九（一九三四）年には民俗協会が創立され、創立に関わった折口や北野博美の関係で、郷土研究会会員も関わることになり、民俗芸能大会開催の際は準備などを手伝った。これにより、今まで見学するだけであった芸能に、直に参加することや舞台裏を体感することが可能になり、より芸能が身近に実感できる機会を得たわけである。これは折口が幼少期に、芝居小屋で遊ぶことで役者の生活を垣間見たことや体感したこととも重なる部分があろう。

この他、日本青年館で開催され日本民俗協会主催の琉球古典芸能大会にも郷土研究会は関わりをもっている。昭和十（一九三五）年末から十一（一九三六）年正月にかけての第三回沖縄採訪で、折口は玉城一座と荒垣一座と話をまとめ、玉城盛重・荒垣松含他約二十名を招いて琉球舞踊及び組踊りが行われ、琉球舞踊ブームのさきがけともなった。

こうした芸能公開も時局が変化するにつれて次第に行われなくなるが、昭和十二（一九三七）年には青森県三戸郡中ノ沢村の南部神楽を実演し、これには当時の学長である河野省三も関わり、河野が宮司をつとめる埼玉県北埼玉郡騎西町の玉敷神社の奉仕の神楽も行われた。また、昭和十四年五月には「公演と神事舞公演大会」で八戸のえんぶり・民謡・剣舞が実演された。そしてこれ以降、昭和二十七（一九五二）年の新野の雪祭り実演まで、年譜上

でも「郷土研究会略史」上でも芸能実演はない。

これらの事例から考えると、実演には、学生に机上で学んだことを実際に体験させて実感させる機能、昭和三（一九二八）年の新野の雪祭りの実演のように、地方に埋もれている芸能を広く学界に周知させる機能、昭和四（一九二九）年の下赤塚の田遊びのように普段非公開であまり調査が進んでいない祭りを間近で観察し調査する機会を得る機能があったことが指摘できる。

以上、見てきたように、郷土研究会は講演・講義・採集報告・民俗芸能実演・見学・調査など多岐にわたる活動内容で、この他にも興味深い活動は大正九（一九二〇）年十一月の宮良当壮の蒐集した八重山の民俗資料の展覧会、昭和十年以降毎年六月に行われたという川祭り、創立記念日の際に行われた化物行列などがある。

化物行列は、國學院大學の創立記念日の運動会に化物行列を出したことが「郷土研究会略史」や永田東一郎の回想「仮装行列」[17]にある。永田の回想では、大正十四年の運動会の際に仮装行列が出たことが書かれ、化け物行列にするよう提言をしたのは折口であったという。提案に賛同した学生が、狸や一つ目小僧、ろくろ首など様々な化け物に扮し校内を練り歩いたようである。永田も一つ目小僧に扮装し、成功した旨が述べられている。折口も化け物に扮した教え子を見るのが楽しかったのか、化け物に扮した学生の顔をのぞき込んで喜んでいた記録がある。この催しは「当時大学内に漲っていた郷土研究熱の点からも適切」であったというように、大正末期國學院大學内に「郷土研究」というものが広まり盛り上がっていたことがわかる。

川祭りは、折口が東北採訪の際に、津軽十三潟地方でおしつこ様（お水虎様）と呼ばれる河童の神像に出会い、土地の仏師にそれを模造させて持ち帰った。川祭りは、そのお水虎様を祭った祭りのことである。昭和十（一九三五）年六月十五日に郷土研究会をあげて行われ、以降十一年、十二年と行われたが、日中戦争以降は行われず、昭和二十一（一九四六）年十一月の大学祭の折に復活したようである。祭事の様子は、

最初西角井が入魂の式をお仕へして、講堂に川棚をしつらへ掛燈籠や参詣の衆が持ち運んだお気に召しさうな種々の供物をして、祭文をあげ、先生の「水神と河童」といふ講話のあと、琉球の踊りと、先生の狂言を会員一同がつとめた。この水神祭にあたつて柳田國男先生から朝日学芸欄にお寄せいただいたお言葉にあるやうに、古い民間祭祀を実感として修める意義を心掛けてゐた。

とある。右は講話の内容から昭和十一（一九三六）年六月十三日に行われた郷土研究会春の大会「川祭り並びに河童を語る会」であると推測できる。川祭りは、「古い民間祭祀を実感として修める」ことを心掛けていたという。

三　折口信夫と郷土研究会の目指したもの

1　折口の郷土観

折口信夫は郷土研究会で何を目指していたのであろうか。

新渡戸と柳田による郷土会の結成は明治四十三（一九一〇）年、雑誌『郷土研究』の発刊は大正三（一九一四）年である。こうした明治末から大正の「地方」あるいは「郷土」への関心は、郷土教育とも結びついたものであった。「郷土教育」の郷土は、在地あるいは居住地という意味だが、郷土研究会をつくった折口の考える「郷土」とはどのようなものであったのか、著作を見ていくと、大正四（一九一五）年八月の大阪朝日新聞の付録である「盆踊りと祭り屋台と」では、「骨の髄まで郷土の匂いのしみこんだ里の男女」[18]という表現がある。ここでの「郷土」は、明らかにその土地という意味である。しかし、大正七（一九一八）年六月に雑誌『アララギ』に掲載された「茂吉への返事」ではやや意味が違う。これは、大正七（一九一八）年五月の茂吉の「釈迢空に与ふ」に対する折口の返答である。斎藤茂吉を田舎の人間、自分を都会の人間として、対比させながらその違いについて述べていて、「郷土」という語を定義づけしている。

日本では真の意味の都会生活が初つて、まだ幾代も経てゐません。都会独自の習慣・信仰・文明を見ることが出来ない、といふことは、かなりた易く、断言が出来ます。そこに根ざしの深い都会的文芸の、出来よう訣がありません。日本人ももつと、都会生活に慣れて来たなら、郷土（郷土の訳語を創めた郷土研究会派の用語例に拠る）芸術に拮抗することの出来る、文芸も生れることになるでせう。

「郷土」を、「郷土の訳語を創めた郷土研究会派の用語例に拠る」とし、「都会」と対峙させている。そして、昭和七（一九三二）年には、

いったい郷土とは、西洋の歴史から考えても、都会から呼びかけられた名、つまり、田舎ということばにすぎないのである。田舎には静かな、豊かな落ち着いた生活があると、都会のあわただしい生活をする人が、そう考えて懐かしんだのである。その心持から郷土ということばは生まれてきたのである。すなわち、そこには古めかしい生活があり、もっぱら古いものを保存し、維持しているものだと、こう考えておったのである。（中略）郷土ということばは、田舎に住んでいる人自身が、だんだん自分の土地をいふようになってきた。これは日本あるいは中国の場合、郷という字がある点まで、故郷、あるいは郷関という連想を抱かせるから、自分の生まれてそして自分のいるところというような感じを適切にもってくる。しかし、これは日本だけのことでなく、外国でもやはりそうなのである。英語でいうfolkland（郷土）ということばは、やはり自分の生まれてから長くそこに住んでいるところ、同時に祖先からそこに住んでいるところというくらいの広い連想をもっている。だから都会からの呼びかけでなくて、田舎人自身でいうことばになってくると同時に、都会人自身も、その都会のことを郷土といってもさしつかえないのである。

（昭和七年「郷土と神社および郷土芸術」[19]）

と説明する。さらに昭和十（一九三五）年「民俗研究の意義」[20]では、

我々は、民俗学といふ語を用ゐる前は、郷土研究と言うてゐたのであるが、近年、此語を用ゐるのが都合が悪くなつた。我々の用ゐた郷土と、最近一般に謂はれてゐる郷土とでは、意味が違ふのである。即、我々の郷土研究は、誰某の郷土、我が郷土などゝいふ、狭い意味の郷土の研究ではなく、其を通り越した――我々の過去、即、日本人の古い相を知る為の郷土研究だつたので――郷土と研究とがくつゝいたものであつたのだが、残念な事には其が再び逆転して、狭い意味の郷土を考へる様になり、更に近頃は、其に対して歴史的な考へ方をする様にさへなつた。最近の郷土教育、郷土史研究が其である。謂はゞ、かうした人達には、言葉の進化といふ事がないとも見られる。また、言葉の意義を無視して、無制限に拡げた結果だとも見られる。

とにかく、最近の郷土研究なるものは、一地方だけに対する知識――殊にその歴史――をいふのであるが、我々の用ゐた郷土研究は、歴史をもつて考へきれないものを、各地に残存してゐるものゝ比較によつて究めようとするのであるから、大きな違ひである。

（昭和十年「民俗研究の意義」）

という。

昭和七（一九三二）年の「郷土と神社および郷土芸術」では郷土とは田舎という言葉に過ぎず、日本人は郷土という場所は「古めかしい生活があり、もっぱら古いものを保存し、維持しているもの」であると考えていたと指摘する。つまり、折口は「郷土」は古代の生活すなわち古い信仰が息づく場所であるという。この郷土を本当の意味で使ったのは柳田國男であり、柳田が「古代精神によって統一せられている、田舎および都会の生活の種々な様式を集めて研究していくこと」に、「郷土研究」ということばを用いたことで「郷土」の意義が決まったとしており[21]、折口のいう郷土の基準は柳田が掲げた「郷土」の思想であったともいえるだろう。

また、郷土とは「土地、家、人」[22]であるとし、昭和初期郷土教育を推進し

ていた民間組織である「郷土教育連盟」の掲げる郷土とは、定義が少々異なっていた。雑誌「郷土」によれば、郷土教育連盟の掲げる郷土とは、「土地と勤労と民族の三つの集合体」であり、慈愛に満ちた伝統と希望に燃える人間の生活場であるとしている。また、生れ故郷を小さい範囲とした上で、都会と農村、国土と世界という広い範囲で郷土を見ることで日本の新しい姿を発見できると述べており、対象はあくまで、地域地方の風土であり、対象を人間の生活としていた折口の考える郷土とは異なっていたことが分かる。

昭和十（一九三五）年の「民俗研究の意義」では、郷土研究とは、当時の郷土教育で言われるような一地方だけに対する限定的な知識をさすのではなく、「我々の過去、即、日本人の古い相を知る為」に「歴史をもつて考へきれないものを、各地に残存してゐるもの、比較によつて究めようとする」学問であると述べる。

以上の点から、折口にとって「郷土」とは、故郷の意味合いではなく、その土地がもつ性格を示す用語なのである。

2　郷土研究会と実感教育

哲学と科学との間に、別に、実感と事象との融合に立脚する新実証学風があるはずである。一方は固定した知識であり、片方は生きた生活である。時としては、両方ともに、生命ある場合もある。この二つを結合するものが、実感である。かうした実証的な方法を用ゐる事の出来ない、死滅した事象の研究法や、補足し難い時間現象を計数の上に立証しようとするのとは、自然違った方法を用ゐてよい訣である。私の研究は、空想に客観の衣装を被せたものは、わりに尠い。民俗を見聞しながら、又は、本を読みながらの実感が、記憶の印象を、喚び起す事から、論理の糸口を得た事が多い。其論理を追究してゐる間に、自らたぐり寄せられて来る知識を総合する。

これは、『古代研究』「追ひ書き」の一部である。折口はここで述べるように、先に述べた郷土研究すなわち古代研究や民俗学を研究する上で実感というものを重視した。この実感が、死滅した事象や補足し難い時間現象を考える際に、民俗の見聞や読書の折に記憶と結びつき、論理のヒントを得たとしている。昭和四年の「民俗学学習の基礎」では、学問材料を集める上で、その材料が学者の身になり、一つのものを採り上げた際、関連したものが出て来ねばならないとする類化性能の必要性を説く。それを磨くには自分自身が体験し実験せねばならない。そうした中で実感という意識が必要になるのだとする。

折口のこの実感を重要視するという姿勢はどのように築かれたのだろうか。折口の研究姿勢に幼少期の経験が影響していることは、諸氏が指摘するところである。[23] 生地の木津が被差別部落に隣接していたこと[24]や、育英高等学校や天王寺中学校への通学路[25]で貧窮街や芝居小屋、花街で培われた感性、隣家の鰻屋の息子の存在、寄留地とした親戚宅近所に住んでいた市川右団次との関わりなど挙げればきりがない。[26] これら幼少期の体験の中で、下層社会の人々の生活を自身の目で見、肌で感じたりすることで培われたものが、後に「古代を研究する場合、どうしても知り尽すことの出来ぬ部分」の「断篇をつなぎ合して一つの形を得る」手助けになったのではないだろうか。これらの体験を経て折口は独自に実感の必要性を学んでいったのであろう。

前述したように、郷土研究会の活動内容を見ていくと、講義や講演で得た知識を、見学や実演などで体感し実感しているようにも見える。

夜話会の採訪報告などもその一つで、永田によれば、折口が講義だけなく研究会員に宿題として採訪調査を指示して発表させ、それに解説を加えていたようである。郷土研究会の活動記録からもそれが見える。また、先に挙げた詳細な採訪目安にしても、信仰の面が大きくクローズアップされる形になっており、他の項目を見ても心意的な要素が加えて含まれており、折口が古い民間の信仰に注意を払っていたのは明らかである。折口は「上代文化研

究法について」でも「ふぉくろあで取り扱う信仰的基礎を持つ精神文化」というように、民俗学では信仰的基礎を持つ精神文化を対象とした旨を述べており、民俗学において古い民間信仰が重要な対象であったかが分かる。

このように、郷土研究会において、何度も行われる見学や芸能の実演は、折口が、講義や文献で得た知識を実際に体験して実感するという行為の必要性を、自身の研究上だけでなく、郷土研究会という組織においても実践していたことがわかる。郷土研究会とは、折口にとって自身の実感教育を施す場であったことが指摘できる。

おわりに

以上、郷土研究会の活動等記録や採訪目安の表を手掛かりに折口と郷土研究会を見てきた。折口が初めて郷土研究というものに触れたのは、大正二年の時分であった。雑誌『郷土研究』が柳田によって創刊されたのが、大正二（一九一三）年三月であり、同年十二月に雑誌『郷土研究』に自身の故郷の民俗を報告した「三郷巷談」を投稿し、大正四年には折口の研究の根幹を担う「髯籠の話」を発表するに到るのである。この郷土研究との出会い、すなわち柳田國男との出会いが、後に「追ひ書き」で「私は先生の学問に触れて、初めは疑ひ、漸くにして会得し、遂には、我が生くべき道に出たと感じた歓びを、今も忘れないでゐる」と述べるように、折口の進むべき道を決定したのである。この一年後に國學院大學内に郷土研究会を創立し、大正八年から本格的に郷土研究の活動を始めるのである。

郷土研究会という場は、下赤塚の田遊びの実演のように、他の会員にはより詳細な調査の機会を提供し、学生には、柳田とは異なった視点から、自身の考える郷土教育というものを行った。それは、信仰に項目の多数を置きながらも、芸能部分に詳細な内容を記した採訪目安を学生に配布し調査の栞としたことや、芸能の実演に関らせた多くの機会からも推測できる。また、自身で教えるだけでなく、他分野にわたる人々を招いて講演を行うなどの幅広い学習の機会も設けている。そして、特筆すべき部分として、実演という形で東京に様々な地方の芸能を呼びよせたことがあげられる。これは幼い頃から芸能に親しんでいたことでその性質を理解していたことや、調査先の人々との深い交流があった折口だからこそ、実現出来たことであろう。このことから、郷土研究会とは地方の芸能を東京に呼ぶことでその芸能が持つ意味を広く世間に知らせる場であったことが指摘できる。

註

（1）『折口信夫全集』三十六巻　折口信夫全集刊行会　中央公論新社　二〇〇一年
（2）『折口信夫全集』三十六巻　折口信夫全集刊行会　中央公論新社　二〇〇一年
（3）「郷土研究会略史」（柳田國男編『民間伝承』十一の十・十一合併号　民間伝承の会　一九四六年）
（4）「土俗と伝説」（有山大五ほか編『迢空・折口信夫事典』勉誠出版　二〇〇〇年）
（5）水木直箭『随筆折口信夫』角川書店　一九七三年
（6）『折口信夫全集』五巻　折口信夫全集刊行会　中央公論新社　一九九五年
（7）永田東一郎「郷土研究会」（『回想の折口信夫』アディン書房　一九八二年）
（8）「私が向ふに居て――もう手柄話のやうですけれど――国学院の郷土研究会といふもの、ことを考へて居ました一つの証拠になるのでありますが、帰つたら一遍話をしようと思ひまして材料を集め出したのです。そのことをこの中に（執筆者注…「郷土研究会略史」）書いてないのは非常に不平なのですが、私は半年位の考案でもつて自分からやつてきてした話なのです。それは西洋の紋の起源ですが、これをヘラルドリーとか何とか言ひますと日本の紋と訳しますので、我々の羽織の背中にくつゝけたものと一緒にしてゐるのです。日本のは戦国時代になつてから、自分の本隊の所在地を知るのが目的のやうでありますから、幕に書いたり旗印に書いたりしたのがもとで、もつと目的が狭いものです。西洋の家紋と称するものは可成り根拠のあるもので、信仰に兆して居るといふことを考へました。（中略）手紙を寄越しまして、帰つたら此の話をするといふことを言つて話したのであります。私は大正十二年の震災の噂をロンドンで聞きまして、それから出発の支度をして暮に帰つて来たのであります。暮でもない……十一月だつたか今頃だつたか帰つて来まして、それどころでは無かつたのですけれども、この新しい方の学校に来てその話をいたしました。」（「郷土研究会の想ひ出」（柳田國男「郷土研究会の想ひ出」『國學院雑誌』第五十五巻一号　折口信夫博士追悼号　國學院

大學　一九五四年）

(9)「その後もしばしば書き改め、休暇で帰省する学生のために郷土研究会で説明し、頒布して採訪目安となさしめた。従つて他にもなほ数種存在する。」（折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集』第十五巻　中央公論社）

(10) 井之口章次「郷土研究会（郷土会）」（井之口章次『歩く・見る・書く―民俗研究六十年―』岩田書院　二〇〇五年二月）

(11) 松本博明「長野県下伊那郡旦開村新野村村落調査ノート」（『折口博士記念古代研究所紀要』第九輯　折口博士記念古代研究所　二〇〇六年所収）

(12) 折口信夫全集刊行会『折口信夫全集』二十一巻　中央公論新社　一九九六年）

(13) 小川直之「折口信夫の新野調査と写真」（『折口博士記念古代研究所紀要』第九輯　折口博士記念古代研究所　二〇〇六年所収）

(14)「東京府北豊島郡赤塚村大字下赤塚字大門の諏訪神社では、毎年旧正月十三日の夜、同社氏子の連中によつて、田遊び行事が執行される。本年六月二十九日、國學院大學郷土研究会の主催で、此氏子の方々を招き、其実演を、同大学講堂で挙行された。実際の祭儀は、厳冬の、而も夜間に行はれるので、我々は、見学はしても、祭儀の模様を詳しく記録するなどゝいふ事は、容易でないと思うて居たので、得難き機会と、此由を会員諸氏に通知し、短時間ではあつたが、出来るだけの採取を試みた。爰に（中略）序に記して置くが、此祭儀は、秘密になつてゐるので、祭儀に与る人々に尋ねても、詳しい事は話して貰へない。」（「武蔵赤塚村諏訪神社田遊び祭りの記録」『民俗芸術』第二巻九号、民俗芸術の会　一九二九年）

(15)「この田遊びは一九二九年（昭和四）に國學院大學郷土研究会に招かれて同大学講堂で上演し、民俗学や芸能史の田遊び研究の出発点ともなった。同上演のさいの記録に現地調査を加え、「民俗芸術」誌同年九月号（二巻九号）に発表された。詞章の全体はこのときに始めて記録されたもので、今日もこの記録がもとにされている。」（新井恒易『農と田遊びの研究』上　明治書院　一九八一年）

(16) 大東敬明「國學院の催しと学問」（國學院大學伝統文化リサーチセンター・平成21年度総合シンポジウム「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」二〇〇九年七月二十五日）

(17)「大正十四年、私の予科二年の時、大学の裏手の空地（今は大学の構内）を借りて、珍しくも大運動会が催された。折口先生から「君の組の仮装行列は、化け物行列にしたらどうか。」とのお話しがあったので、（中略）そこで皆それぞれに化け物を研究して、なかなか上手に扮装して会場を練り歩いた。（中略）当時大学に張っていた郷土研究熱といった点から見ても適切な催しとなって、沢山の学生たちが寄って来て写真にとられた。」（永田東一郎「仮装行列」）

(18)「夜に入ると、此（執筆者注…だいがく）に蝋燭を入れて、夜空に華かな曲線を漂し出すと、骨髄まで郷土の匂ひの沁み込んだ里の男女は、心も空に浮れ歩く。其柱の先には、前に述べただしを挿すのである。」（折口信夫全集刊行会『折口信夫全集』二巻　中央公論新社　一九九五年）

(19) 折口博士記念古代研究所編『折口信夫全集』ノート編　六巻　中央公論社　一九七二年

(20)『折口信夫全集』十九巻　折口信夫全集刊行会　中央公論新社　一九九六年

(21)「この郷土ということばを、本当の意味の用語に使いだされたのは、柳田國男先生なのである。それ以前もこのことばはあるが、それはただ簡単な使い方にすぎない。更に先生は、そういう古代精神によって統一せられている、田舎および都会の生活の種々な様式を集めて研究していくことに、「郷土研究」ということばを用いられた。それで、日本における郷土ということばの意義が決まってきた。すなわち、郷土研究ということばを通じて郷土の意義が決まったわけである。」（「郷土と神社および郷土芸術」（『折口信夫全集』ノート編　六巻所収））

(22)「この郷土を考えるには標準がある。それは、土地、家および人、この三つの単位を一つにしたものが、郷土なのである。政治上からいって、郷土とは、政治組織が進んでくるいま一つ前の古い時代の邑落すなわち、国によって統一されない村なのである。土地が、家および郷土を構成する基礎であることには議論はないが、その家に関連して、人間のことはどうしても考えていかねばならない。つまり、われわれの学問の対象は自然科学ではなくて、すべて人間でなくてはならないのである」（「郷土と神社および郷土芸術」（『折口信夫全集』ノート編　六巻所収））

(23)　一例を挙げれば、小川直之は、十歳以前からの歌舞妓体験の記憶は、自身の学問や文学創作に底流しており、芸能発生論や芸能史などへの視点を促したことを「折口信夫博士の歌舞妓絵葉書コレクションについて」の中で指摘している。また、この幼少期の芸能との関わりに関しては、拙稿「折口信夫の歌舞伎絵葉書コレクションについての一考察」（『伝統文化リサーチセンター紀要』第一号　二〇〇九年）でも詳しく述べた。

(24)「木津村は今、大阪市南区（現在更に浪速区）木津となつた。所謂「木津や難波の橋の下」と謡れた、鼬（イタチ）川といふ境川一つを隔てゝ、南区難波、即、元の難波村と続いてゐる。東は今宮、西は南（ミナン）町と言ふ、かの渡辺（ワタナベ）で通つた、えた村である。此二つの村との間には、十年前までは畑も見られたが、今は、両方から軒並びが延びて来て、地境を隠して了うた。南町は、関西鉄道の線路敷が高いどてを横へてゐなかつたら、今頃は、名実ともに、百年二百年毛嫌ひを増上させて来た部落と、見わけがつかなくなつたはずである。」（「折口という名字」）

(25)「明治二十九年　大阪市南区竹屋町、育英高等学校に区外生として入学。通学の道程一里。途中、千日前・道頓堀及び、所謂南地五花街を経る」（「自撰年譜　一」）

「明治卅二年　南区上本町八丁目、天王寺中学校に入学。（略）通学距離二十町余。道、江戸時代以来の貧窮街長町裏・家隆塚と伝へる夕陽个丘・勝曼院・巫女町を通る」（「自撰年譜　一」）

(26)　山本健吉は「折口信夫――学問と思想」（山本健吉『山本健吉全集　第九巻』講談社　一九八四年二月）の中で、鰻屋の息子の存在と、道頓堀・千日前などの芝居小屋区画と南地五花の花街を通った育英高等小学校通学路の培った感性を指摘し、また、中村浩は「右団次の周辺」（中村浩『若き折口信夫』　中央公論社　一九七五年一月）で、育英高等小学校時分に寄留地とした親戚宅近所に住んでいた市川右団次との関わりを述べ、名前を訂正するほどの熟知ぶりを披露するほどの知識を持っていたことを指摘する。

表１　郷土研究会等活動記録

No	年代	月日	内容	種別
1	大正5年	—	この年、國學院大學内に郷土研究会を創立	創立
2	大正8年	10月25日	國學院大學郷土研究会（蘇生会）で、「歴史と民譚との境目」を講演。中山太郎「養子の話」、金田一京助「アイヌの伝説」。以後、中山金田一とともにこの会のために講演する事が多い	講演
3	大正8年	11月13日	郷土研究会で金田一京助の講演「歴史と民譚との境目」を聴く。折口解説。	講演
4	?	?	渾大防小平氏の採集報告に対する中山太郎氏の解説。沈鐘伝説について三先生に加えて紀平正美の座談	夜話会
5	大正9年	2月7日	郷土研究会で「藪入りの話」を講演、水木直箭・牛島軍平の採集報告	講演・夜話会
6	大正9年	2月28日	杉本舜市の採集報告と折口の解説	夜話会
7	大正9年	5月15日	金田一京助「山のとね里のとねの話」、大場磐雄の座敷わらし、細川清の阿波国の採集報告、今昔物語の霊鬼部の研究	講演・夜話会
8	大正9年	6月頃	郷土研究会で土居光知の講演「日本文学を通じて見たる文化の展開」を聴く	講演
9	大正9年	9月28日	自宅で國學院大學郷土研究会例会を開き、柳田國男の講演「フォクロアの範囲」を聴く	講演
10	大正9年	10月5日	自宅で國學院大學郷土研究会例会を開き、柳田國男の講演「フォクロアの範囲」を聴く	講演
11	大正9年	11月7日	郷土研究会主催で宮良當壯蒐集の八重山土俗展覧会を開く	展覧会
12	大正9年	12月4日	國學院大學郷土研究会で民間伝承学を講義	講義
13	大正9年	12月10日	國學院大學郷土研究会で民間伝承学を講義	講義
14	大正10年	1月28日	國學院大學郷土研究会で民間伝承学を講義	講義
15	大正10年	2月14日	國學院大學郷土研究会で民間伝承学を講義	講義
16	大正11年	5月14日	國學院大學郷土研究会に南方熊楠を招くも大酔して講演できず	講演
17	大正11年	5月29日	郷土研究会会員を連れて南方熊楠を訪ねる	—
18	大正11年	11月10日	郷土研究会で、伝説型式 Guinevere type より中将姫伝説について講義	講義
19	大正12年	2月9日	故高木敏雄の追善を兼ねた郷土研究会で、毛髪の神秘に対する古代人の観念について講義	講義
20	大正12年	3月1日	金田一京助『アイヌ聖典』上梓を記念した郷土研究会で、景清伝説の話をする	講演
21	大正12年	5月12日	郷土研究会で「民間伝承の概念」を講義	講義
22	大正12年	6月14日	郷土研究会で講義	講義
23	大正12年	11月17日	郷土研究会に帰朝した柳田國男を迎え、「建築に現れたる犠牲の痕跡としての牛紋様」を聴く	講演
24	大正15年	1月	早川孝太郎と、三州北設楽郡豊根村牧ノ島三沢の花祭り、信州下伊那郡旦開村新野の雪祭り（折口命名）を初めて見学。以後、毎年のように訪れる	—
25	昭和2年	1月22日	國學院大學郷土研究会（三河鳳来寺の地狂言の翁）	講義
26	昭和2年	1月29日	郷土研究会（景事・ほめことば）	講義
27	昭和2年	2月5日	郷土研究会（民間伝承学講義、ヒューマン・インデックスの話）	講義
28	昭和2年	2月	遠州周智郡水窪町西浦の田楽を見学	見学
29	昭和2年	3月	郷土研究会会員を伴い、三州北設楽郡豊根村金越に花祭りを見学	見学
30	昭和2年	5月	相州大山阿夫利神社で大山能を見学	見学
31	昭和3年	1月	三州北設楽郡金越を中心とする花祭りを再度見学	見学
32	昭和3年	1月18日	水窪（西浦の田楽を見学）を経て帰る	見学
33	昭和3年	6月22日	郷土研究会主催の「七夕と盆に関する講演会」で講演	講演
34	昭和3年	6月	郷土研究会で「花の話」講演	講演
35	昭和3年	10月21日	郷土研究会の主催で、三州北設楽郡豊根村山内の村人十数人を招いて、花祭り二十数番を実演、解説をする。(國學院大學講堂)	実演
36	昭和4年	2月13日	郷土研究会主催の講演会で雛祭りについて講演。天岩戸神楽が実演された	講演・実演
37	昭和4年	6月29日	國學院大學郷土研究会夏の大会（國學院大學講堂）で、東京府豊島郡赤塚村下赤塚諏訪神社の田遊びを実演、「田遊び祭りの概念及びその解説」を講演	講演・実演

No	年代	月日	内容	種別
38	昭和4年	9月26日	郷土研究会で「民俗学学習の基礎」を講演	講演
39	昭和4年	11月16日	郷土研究会秋の大会「南島研究の会」で、「をとめの島」を講演	講演
40	昭和4年	暮れ	埼玉県大宮の西角井正慶宅で、潤戸村の「三番叟」、「万作芝居」、「でろれん祭文」の実演を見学	実演・見学
	昭和5年	1月4日	早川孝太郎・宮本勢助・今和次郎らと、三州御薗村足込の花祭りを見学	見学
41	昭和5年	2月14～16日	北野博美・小寺融吉・西角井正慶らと遠州西浦の田楽を見学	見学
42	昭和5年	4月14・15日	國學院大學郷土研究会の主催で足込の花祭りを実演	実演
43	昭和5年	4月22日夜	民俗芸術の会・國學院大學郷土研究会主催で西浦の田楽を実演、解説する	実演
44	昭和5年	5月3日	郷土研究会主催で信州新野の雪祭りを実演	実演
45	昭和5年	10月	慶應義塾大学・國學院大學学生十数人と信州新野に村落調査のため10日間滞在	調査
46	昭和5年	12月13日	郷土研究会冬の大会で「国文学における民俗学的方法」を講演	講演
47	昭和6年	1月22日	郷土研究会講演にて、神の通る道について講演	講演
48	昭和6年	2月12日	郷土研究会で「諏訪の御柱」について講義	講義
49	昭和6年	4月23日	郷土研究会（民俗学概論第1回）	講義
50	昭和6年	5月7日	郷土研究会（民俗学概論第2回）	講義
51	昭和6年	5月14日	郷土研究会（民俗学概論第3回）	講義
52	昭和6年	6月11日	郷土研究会（鷺の話・刀の話）	講義
53	昭和6年	6月13日	金田一京助『アイヌの研究』出版記念の國學院郷土研究会公開講演で、「虎杖丸に因みて」を講演	講演
54	昭和6年	6月18日	郷土研究会（刀の話の続き）	講義
	昭和6年	8月6日	民俗芸術の会主催琉球舞踊古典劇公演会（日本青年館）で、「組踊りと端踊りと」を講演	講義
55	昭和6年	10月1日	郷土研究会	—
56	昭和6年	10月8日	郷土研究会（たましひの話）	講義
57	昭和6年	10月15日	郷土研究会（たましひの話続き）	講義
58	昭和6年	11月19日	郷土研究会（たましひの話――夏の語源）	講義
59	昭和6年	11月20日	郷土研究会（神道集諏訪縁起）	講義
60	昭和6年	11月26日	郷土研究会（「ちぎり」の話）	講義
61	昭和6年	12月3日	郷土研究会（鬼の話、売る・買うということ）	講義
62	昭和6年	12月5日	郷土研究会大会「国文学に於ける民俗学的方法―枕詞を中心として―」を講演	講演
63	昭和6年	12月5日	郷土研究会。講義の後、台湾生蛮アミ族内地見学団の舞踊実演	講義・実演
64	昭和7年	2月4日	郷土研究会（囃子詞の成り立ち）	講義
65	昭和7年	5月3日	郷土研究会（民俗学について）	講義
66	昭和7年	5月10日	郷土研究会（民俗の個性化）	講義
67	昭和7年	5月17日	郷土研究会（民俗学の普遍化）	講義
68	昭和7年	5月31日	郷土研究会（石の信仰〈三〉）	講義
69	昭和7年	6月4日	國學院郷土研究会大会で八王子車人形を実演（曲目「山椒太夫」「小栗判官」「刈萱」）、解説をする	実演
70	昭和7年	6月7日	郷土研究会（民俗の起源）	講義
71	昭和7年	6月14日	郷土研究会（民俗の起源<二>、トーテミズム論）	講義
72	昭和7年	6月21日	郷土研究会（民俗の起源<三>）	講義
73	昭和7年	6月28日	郷土研究会（採訪目安の解釈）	講義
74	昭和7年	9月27日	郷土研究会（昔話の話）	講義
75	昭和7年	10月11日	郷土研究会（歌の話）	講義
76	昭和7年	11月15日	郷土研究会（結婚の種々相）	講義
77	昭和7年	12月3日	郷土研究会大会公開講演会（神職会館）で「御柱神事の意義」を講演	講演
78	昭和7年	12月6日	郷土研究会（常陸の民俗・神武記について）	講義
79	昭和7年	12月13日	郷土研究会（民俗芸術の話）	講義
80	昭和8年	5月30日	郷土研究会（「やまと」について）。夜、民俗芸術の会（日本青年館中講堂）で、第七回郷土舞踊民謡大会の印象談「素人の芸、玄人の芸」を話す	講義
81	昭和8年	6月6日	郷土研究会（『民俗学入門』第二章）	講義

No	年代	月日	内容	種別
82	昭和8年	6月13日	郷土研究会（口頭文学の話）	講義
83	昭和8年	6月17日	國學院郷土研究会大会で「人形の話」を講演	講演
84	昭和8年	6月20日	郷土研究会（民俗学の研究方法『民俗学入門』、人形の話続き）	講義
85	昭和8年	6月27日	郷土研究会（民間行事伝承採訪要目解説）	講義
86	昭和8年	10月28日	國學院郷土研究会の佐々木喜善追悼講演会「座敷小僧の話」を講演	講演
87	昭和8年	11月7日	郷土研究会で、北沢怡佐雄「野大坪万歳採訪報告」を解説	夜話会
88	昭和8年	12月14日	郷土研究会夜話会で「『しも』の話」を講演	夜話会・講演
89	昭和9年	2月13日	國學院郷土研究会の大会「アイヌの歌舞を中心としての会」で、「アイヌの神謡に沿うて」を講演	講演
90	昭和9年	5月3日	郷土研究会（何故民俗学は必要か）	講義
91	昭和9年	5月10日	郷土研究会（民俗とは何か）	講義
92	昭和9年	5月17日	郷土研究会（神話について）	講義
93	昭和9年	5月24日	郷土研究会（フォークロアと文学）	講義
94	昭和9年	5月26日	郷土研究会の「神事芸能の会」で「夏神楽」を講演。夜、西角井正慶『神楽研究』出版記念会（レインボー・グリル）に出席	講演
95	昭和9年	5月31日	郷土研究会（食物の話）	講義
96	昭和9年	6月14日	郷土研究会（トーテムの話）	講義
97	昭和9年	6月28日	郷土研究会（御料・御寮人の話、民間伝承採訪要目解説）	講義
98	昭和9年	6月30日	郷土研究会夜話会（院友会館）で、万作踊りを実演	夜話会・実演
	昭和9年	6月	日本民俗協会創立	—
99	昭和9年	7月27日	郷土研究会（神道史に添うて・贖罪観念について）	講義
100	昭和9年	10月4日	郷土研究会（民俗研究の意義）	講義
101	昭和9年	10月11日	郷土研究会	—
102	昭和9年	10月25日	郷土研究会（変化と残存と）	講義
103	昭和9年	11月8日	郷土研究会（西津軽の家の建て方について）	講義
104	昭和9年	11月15日	郷土研究会（一国民俗学の解説）	講義
105	昭和9年	12月6日	郷土研究会	—
106	昭和9年	12月8日	郷土研究会の中山太郎『日本盲人史』出版を祝う大会で「蝉丸」を講演	講演
107	昭和10年	1月31日	郷土研究会（お伽ばなしについて）	講義
108	昭和10年	2月2日	郷土研究会講演会で「先生の書歴、説歴」を講演。続いて柳田國男が「郷土研究の成長」を講演し、折口の学問の危うさを指摘	講演
109	昭和10年	2月7日	郷土研究会	—
110	昭和10年	5月2日	郷土研究会（民俗学序説）	講義
111	昭和10年	5月4日	國學院大學郷土研究会・国文学会主催、金田一先生祝賀記念講演会「額田王」を講演	講演
112	昭和10年	5月16日	郷土研究会（心意伝承、「やまと」という語について）	講義
113	昭和10年	5月26日	國學院郷土研究会遠足、鬼神神社・吉見百穴・北向天神ほか回る	見学
114	昭和10年	5月30日	郷土研究会（「やまとしま」）	講義
115	昭和10年	6月15日	國學院大學郷土研究会で川祭りを挙行し、俄狂言「わが命の早づかひ」上演。川祭りは以後例年の行事となり、水虎像は大井出石宅玄関に祀られる	上演・祭
116	昭和10年	6月20日	郷土研究会（「あがた」という語、田舎における民俗採集<一>）	講義
117	昭和10年	6月27日	郷土研究会（田舎における民俗採集<二>、採集調査標目解説）	講義
	昭和10年	7月4日	日本民俗協会主催、小念仏（万作芝居）実演（東京商工会館）	実演
118	昭和10年	9月26日	郷土研究会（賽の神の話<一>）	講義
119	昭和10年	10月3日	郷土研究会（賽の神の話<二>）	講義
120	昭和10年	10月10日	郷土研究会（民俗学から方俗学へ）	講義
121	昭和10年	10月26日	日本民俗協会主催第一回民俗芸能大会で、常陸金砂田楽公演（日比谷公会堂）	実演
122	昭和10年	11月14日	郷土研究会（七五三の祝い、附、賽の河原）	講義
123	昭和10年	12月12日	郷土研究会（正月の話、かばね<姓>の話）	講義
	昭和10～11年		第三回沖縄採訪	—
124	昭和11年	1月30日	郷土研究会（久高島の婚姻及び葬制）	講義
125	昭和11年	2月6日	郷土研究会（国頭地方のカミアシャゲ・ノロその他の神人）	講義

No	年代	月日	内容	種別
126	昭和11年	2月8日	國學院郷土研究会大会（國學院大學講堂）で「琉球王の出自」を講演	講演
127	昭和11年	2月13日	郷土研究会（礼儀の発生）	講義
128	昭和11年	3月17日	郷土研究会（正月行事の概念）	講義
129	昭和11年	4月23日	郷土研究会（郷土研究の必要な所以・組踊りについて）	講義
130	昭和11年	5月7日	郷土研究会（姦通と盗賊と）	講義
131	昭和11年	5月21日	郷土研究会（盗みと憎しみと妬みと）	講義
132	昭和11年	5月30・31日	日本民俗協会主催琉球古典芸能大会を日本青年館で開催。玉城盛重・新垣松含他約20名を招き琉球舞踊及び組み踊りの公演を催す。琉球舞踊ブームのさきがけとなる	実演
133	昭和11年	6月11日	郷土研究会（河童の話）	講義
134	昭和11年	6月13日	郷土研究会春の大会「川祭り並びに河童を語る会」で、「水神と河童と」を講演。川祭り祭主西角井正慶。北原白秋・斎藤茂吉ら出席	講演・祭
135	昭和11年	6月18日	郷土研究会（憤りと道徳と）	講義
136	昭和11年	6月25日	郷土研究会（道徳の話）	講義
137	昭和11年	9月24日	郷土研究会（礼儀の話）	講義
138	昭和11年	10月1日	郷土研究会（義理の話）	講義
139	昭和11年	10月8日	郷土研究会（義理と義務と）	講義
140	昭和11年	10月22日	郷土研究会（任侠の話<一>）	講義
141	昭和11年	11月12日	郷土研究会（任侠の話<二>）	講義
142	昭和11年	12月17日	郷土研究会（正月行事「拝みと宣り」、賽の神祭り）	講義
143	昭和12年	1月28日	郷土研究会（民俗学総論）	講義
144	昭和12年	5月1日	國學院郷土研究会で青森県三戸郡中ノ沢村の南部神楽・埼玉県北埼玉郡騎西町玉敷神社の神楽を実演、「神道に於ける神楽の意義」を講演	講演・実演
145	昭和12年	5月12日	郷土研究会（民俗学入門）	講義
146	昭和12年	5月27日	郷土研究会（民俗学概論・万葉集の恋歌及び民謡）	講義
147	昭和12年	6月3日	郷土研究会（冠婚葬祭の話）	講義
148	昭和12年	6月10日	郷土研究会（冠の話）	講義
149	昭和12年	6月17日	郷土研究会（結婚と婚礼と）	講義
150	昭和12年	6月24日	郷土研究会（婚前の話）	講義
151	昭和12年	6月	郷土研究会　川祭り	祭
152	昭和12年	9月30日	郷土研究会（憎悪の話）	講義
153	昭和12年	10月7日	郷土研究会（嫉みの話）	講義
154	昭和12年	10月14日	郷土研究会（じんぎの話）	講義
155	昭和12年	10月21日	郷土研究会（挨拶の話）	講義
156	昭和12年	10月28日	郷土研究会（喧嘩口論の話）	講義
157	昭和12年	11月11日	郷土研究会（かまどの話）	講義
158	昭和12年	12月9日	郷土研究会（好きということ）	講義
159	昭和13年	1月27日	郷土研究会（行事伝承の話）	講義
160	昭和13年	2月3日	郷土研究会（節分と鬼と）	講義
161	昭和13年	2月10日	郷土研究会（正月の話）	講義
162	昭和13年	4月28日	郷土研究会（これからの民俗学）	講義
163	昭和13年	5月7日	國學院大學郷土研究会大会で、石澤豊の講話「蘭領印度の実情」、ジャワ・バリの民俗舞踊及びソロー宮廷の舞踊映画を上映、「日本民俗に於ける南方要素」を講演	講話・講演・上映
164	昭和13年	5月12日	郷土研究会（年中行事の話の前置き）	講義
165	昭和13年	5月26日	郷土研究会（こと八日の話）	講義
166	昭和13年	6月2日	郷土研究会（歳男の話）	講義
167	昭和13年	6月9日	郷土研究会（歳神の話）	講義
168	昭和13年	6月16日	郷土研究会（家の話）	講義
169	昭和13年	6月23日	郷土研究会（正月の山入り）	講義
170	昭和13年	9月22日	郷土研究会（民族芸術）	講義
171	昭和13年	9月29日	郷土研究会（芸能伝承の話<一>）	講義
172	昭和13年	10月6日	郷土研究会（芸能伝承の話<二>）	講義
173	昭和13年	10月13日	郷土研究会（芸能伝承の話<三>）	講義
174	昭和13年	10月20日	郷土研究会（芸能伝承の話<四>）	講義

No	年代	月日	内容	種別
175	昭和13年	10月27日	郷土研究会（芸能伝承の話<五>）	講義
176	昭和13年	11月10日	郷土研究会（芸能伝承の話<六>）	講義
177	昭和13年	11月17日	郷土研究会（芸能伝承の話<七>）	講義
178	昭和13年	11月24日	郷土研究会（芸能伝承の話<八>）	講義
179	昭和13年	12月15日	郷土研究会（正月行事の話）	講義
180	昭和14年	1月19日	郷土研究会（さえの神の話）	講義
181	昭和14年	1月26日	郷土研究会（石の信仰とさえの神と）	講義
182	昭和14年	2月2日	郷土研究会（低級な神の話）	講義
183	昭和14年	2月9日	郷土研究会（化け物の話）	講義
	昭和14年	4月	國學院大學文学部国文学演習に初めて「民俗学」を講義。学内に民俗資料室を設ける。	—
184	昭和14年	5月3日	郷土研究会（たましひ・外来魂の話）	講義
185	昭和14年	5月6日	國學院郷土研究会主催「講演と神事舞公演大会」で、八戸のえんぶり・民謡・剣舞を公演	実演
186	昭和14年	5月17日	郷土研究会（みたまのふゆ）	講義
187	昭和14年	5月24日	郷土研究会（刀の話）	講義
188	昭和14年	5月31日	郷土研究会（ほこ、やりの話）	講義
189	昭和14年	6月7日	郷土研究会（枕の話）	講義
190	昭和14年	6月21日	郷土研究会（「ろじ」と「つじ」と）	講義
191	昭和14年	6月28日	郷土研究会（霊地・古墳の話）	講義
192	昭和14年	9月20日	郷土研究会	—
193	昭和14年	9月27日	郷土研究会（いぶる、いずみ、つぶら）	講義
194	昭和14年	10月4日	郷土研究会（産婆、子守、乳母）	講義
195	昭和14年	10月25日	郷土研究会（産神、箒神）	講義
196	昭和14年	11月1日	郷土研究会（氏神、氏子、氏子入り、たふさき祝ひ）	講義
197	昭和14年	11月29日	郷土研究会（八神殿の神）	講義
198	昭和14年	12月6日	郷土研究会（うまれきよまり、せだかさ）	講義
199	昭和15年	1月24日	郷土研究会（門と垣と）	講義
200	昭和15年	1月31日	郷土研究会（宮門の話）	講義
201	昭和15年	2月7日	郷土研究会（「じょう」の話）	講義
	昭和15年	10月10日	日本民俗協会解散の会に出席	—
202	昭和16年	1月29日	郷土研究会（椿の花の信仰・八百比丘尼の話）	講義
203	昭和16年	2月5日	郷土研究会	—
204	昭和16年	5月21日	郷土研究会「民俗学の目的」を講話	講話
205	昭和21年	5月28日	郷土研究会（伝説と昔話と）　テキスト「民俗学入門」「伝説」	講義
206	昭和21年	6月4日	郷土研究会（椀貸し渕の話　一）	講義
207	昭和21年	6月11日	郷土研究会（椀貸し渕の話　二）	講義
208	昭和21年	6月18日	郷土研究会（伝説と文学と）	講義
209	昭和21年	6月27日	郷土研究会（採訪目安解説）（納め会）	講義
210	昭和21年	10月15日	郷土研究会（伝説と童話との関係）	講義
211	昭和21年	10月29日	郷土研究会（河童祭りの話）	講義
212	昭和21年	11月19日	郷土研究会（門松の話　一　（正月と霊魂信仰））	講義
213	昭和21年	11月26日	郷土研究会（門松の話　二　（御竈木の儀式））	講義
214	昭和21年	12月10日	郷土研究会（採訪目安解説・大晦日の話）、（納め会）	講義
215	昭和22年	1月28日	宮城県伊具郡金山町附近の正月行事――中野一郎報告	報告
216	昭和22年	2月4日	郷土研究会（沖縄の女性　一）	講義
217	昭和22年	2月18日	郷土研究会（沖縄の女性　二）	講義
218	昭和22年	2月20日	西彼杵半島正月行事――井之口章次報告	報告
219	昭和22年	2月25日	岡山県苫田郡加茂町正月行事――前橋英夫報告、（納め会）	報告
220	昭和22年	5月7日	郷土研究会（忌詞の話　一）、西彼杵半島漁村採訪――井之口章次報告	講義・報告
221	昭和22年	5月21日	郷土研究会（忌詞の話　二）	講義
222	昭和22年	5月28日	郷土研究会（名付けについて）　テキスト「産育語彙」	講義
223	昭和22年	6月11日	郷土研究会（苗字の話）	講義
224	昭和22年	6月18日	郷土研究会（方言について）	講義
225	昭和22年	10月8日	駿州徳山村堀之内採訪――鈴木正彦報告	報告
226	昭和22年	10月15日	郷土研究会（稲村について）	講義

No	年代	月日	内容	種別
227	昭和22年	10月25日	郷土研究会主催伊波普猷追悼会（郷土研究会大会）で折口信夫「沖縄の学問の過去・未来」、金田一京助「伊波君の追憶」、柳田國男「学者の後」講演	講演
228	昭和22年	10月29日	郷土研究会（方法論　一）	講義
229	昭和22年	11月11日	郷土研究会（方法論　二）	講義
230	昭和22年	11月19日	郷土研究会（方法論　三）	講義
231	昭和23年	2月18日	郷土研究会（道祖神）	講義
232	昭和23年	5月10日	郷土研究会（玉と巫）――藤野岩友代講	講義
233	昭和23年	5月17日	郷土研究会（伝説　一）	講義
234	昭和23年	5月22日	郷土研究会主催北野博美記念追悼会で「民俗芸術研究の栞」を講演	講演
235	昭和23年	5月24日	郷土研究会（伝説　二）	講義
236	昭和23年	6月14日	郷土研究会（伝説　三　（道徳の発生））	講義
237	昭和23年	6月21日	郷土研究会（伝説　四　（神と精霊））	講義
238	昭和23年	6月28日	郷土研究会（伝説　五　（伝説と語りごと））	講義
239	昭和23年	9月27日	國學院の芸能史学会・郷土研究会共催「近松浄瑠璃鑑賞会」で、午前と午後の二回講演する（國學院大學講堂）	講演
240	昭和23年	10月4日	郷土研究会（昔話　一　（継子話））　テキスト「昔話名彙」	講義
241	昭和23年	10月11日	郷土研究会（昔話　二　（蛇息子））	講義
242	昭和23年	10月14日	郷土研究会（昔話　三　（桃ノ子太郎））	講義
243	昭和23年	10月25日	郷土研究会（昔話　四　（妻の力））	講義
244	昭和23年	10月30日	國學院の郷土研究会・宗教学会共催、田中義能・佐伯有義・山本信哉三博士追悼祭（國學院大學講堂）で講演	講演
245	昭和23年	11月8日	郷土研究会（昔話　五　（天人女房））	講義
246	昭和23年	11月15日	郷土研究会（昔話　六）	講義
247	昭和24年	1月24日	郷土研究会（昔話　七　（藁しべ長者））　、花祭り見学報告――清崎・西村・鈴木・三隅・井之口	講義・報告
248	昭和24年	1月31日	郷土研究会（昔話　八　（昔話と神話））	講義
249	昭和24年	2月14日	郷土研究会（昔話　九　（百合若大臣））　、味噌の話――井之口章次	講義
250	昭和24年	5月20日	郷土研究会（舩霊の話）	講義
251	昭和24年	5月27日	郷土研究会（村の話　一）	講義
252	昭和24年	6月3日	郷土研究会（村の話　二　（平野の村））	講義
253	昭和24年	6月10日	郷土研究会（村の話　三　（村の歴史をめぐって））	講義
254	昭和24年	6月17日	郷土研究会（住居）	講義
255	昭和24年	6月24日	郷土研究会（住居・服装）	講義
256	昭和24年	10月14日	郷土研究会（副食）	講義
257	昭和24年	10月21日	郷土研究会（特殊な食物）	講義
258	昭和24年	10月28日	郷土研究会（労働の話　一）	講義
259	昭和24年	12月2日	郷土研究会（労働の話　二）	講義
260	昭和24年	12月9日	郷土研究会（労働の話　三）	講義
261	昭和24年	12月16日	郷土研究会（納め会）	―
262	昭和27年	11月	日本青年館の郷土芸能大会で信州新野の雪祭りを実演、翌日、國學院大學講堂で再度実演	実演

＊　参照：『折口信夫全集』36巻（折口信夫全集刊行会　中央公論社　2001年２月）
「郷土研究会略史」（柳田國男編『民間伝承』十一の十・十一合併号　民間伝承の会　1946年10月）
「郷土研究会（郷土会）」（井之口章次『歩く・見る・書く　―民俗研究六十年―』　岩田書院　2005年２月）

表２　民間伝承蒐集事項目安

1	信仰に関するもの	1	国家的信仰	1	○宗教意識の展開に関する研究資料	
		2	民間信仰	1	○其残り	
				2	○布教法	
				3	○分布及び遺跡	
				4	○民間宗教家伝記（聖徳太子・弘法大師・性空上人の如き伝説化したる類より、実在疑はしき都藍尼・通玄の如き空想的人物或は、近世修験派の、名山を開ける輩、或は迷信宣布者と考へらるゝ人々に及ぶ）	
				5	○男女布教・勧進の徒の生活並びにその堕落	
				6	○奇跡	
		3	他界観念	1	○幽冥界（神の世界・死の国）	
				2	○異郷（福寿の楽土・鬼物の棲息地と考へらるゝ空想地）	
				3	○隠れ里（京丸・白川・五个荘・祖谷の類）に関したる民譚信仰	
		4	巫術・蠱術・妖術	1	○方法	
				2	○術語	
				3	○呪文・祭文（蓄音器による譜記録）	
				4	○用具	
				5	○奉仕当体の名称・取扱ひ方等	
				6	○家系・伝統・相承の形式	
				7	○住宅並びに生活法	
				8	○副業	
				9	○分布	
				10	○維新前の状態	
				11	○当事者の談話（信仰・伝説其他）	
				12	○他人の観察	
				13	○死霊	
				14	○生き霊	
				15	○遊離魂・離魂病	
				16	○鎮魂	
				17	○魂の形態	
				18	○魂の生物の形をとること	
				19	○魂魄の種類	
		5	神社と寺院と	1	○本書・傍書以外に変形したる伝説	
				2	○社家・御師・宿坊等	
				3	○社寺附属の人・土地並びに其伝統（童子村・神人村・門前などいふ部落との交渉、地方芸人との関係）	
				4	○社領・寺領	
				5	○氏子・信者	
				6	○宮座	
				7	○頭屋（トウヤ）	
				8	○供饌（種類・員数・調理法など）	
				9	○神仏と地物・農作物との関係（神木・影向地・倖愛物呪詛譚）	
				10	○人身御供	
				11	○神体の霊異	
				12	○神仏混淆時の状態	
				13	○信徒との関係	
				14	○檀那場と分布	
				15	○講社	
				16	○ある神仏の民間の通称	
				17	○摂社・末社・塔頭・僧坊	
				18	○山宮・奥の院・里の宮・御旅所	
		6	叢祠其他	1	○子供・若衆との関係	
				2	○其所在	
				3	○其移動の痕跡	
		7	祭礼	1	○祭礼前の行事	
				2	○祭主・尸童と物忌み	
				3	○時期・時刻・所用の時数	
				4	○祭式・儀礼	
				5	○神輿・祭り屋台（山車・地車・鉾の類）・梵天・万度燈	
				6	○祭礼執行の次第	
				7	○神楽・田楽・獅子舞其他の催し物に関する演技法の伝説等	

				8	○鬼・天狗・もどき（火男）	
				9	○仮面	
				10	○祭礼時に於ける特定或は一般の氏子の生活・行事・禁忌	
				11	○祭礼後の状態	
		8	妖怪	1	○名彙	
				2	○分業状態	
				3	○形態性質	
				4	○家及び物との関係	
				5	○其起因の変遷	
				6	○分布	
				7	○神・精霊の衰退・淪落の痕と見るべき資料	
				8	○畏怖せらるゝ地域	
				9	○名だけ伝るもの	
				10	○祟り	
				11	○神隠し	
				12	○餓鬼	
2	医療・禁厭	1	民間薬物名彙			
		2	病災除却法（祈祷・まじなひ・呪文）			
		3	防止法			
		4	疫病の地方的名彙			
		5	民間療法	1	○説明伝説	
				2	○処置	
				3	○伝統・家系	
				4	○同一方法の分布	
				5	○動物報酬譚	
		6	疫病の司神	1	○説明伝説	
				2	○形状・退散法等	
				3	○疫神送りの歌	
3	一般風習	1	地方的一般年中行事			
		2	特殊年中行事	1	○家族的のもの	信仰（屋敷神・氏神・職神等）伝説・特殊の技術・為事始め・為事上りの儀式・器具・雇傭人・生計製作物の販路・共済組合
				2	○団体的のもの	漁猟・樵・舟夫（蜑・シヤア・木地屋・サンクワ者の類をも含む）・農民労働者（力役）・職人（手工・遊芸人を含む）・商人・博徒・・・等
		3	婚姻	1	○求婚法	
				2	○結納	
				3	○掠奪の遺風	
				4	○初夜権	
				5	○結婚式	
				6	○式後の風習（婿入り・三日帰り・七日帰りなど）	
				7	○未婚者	
				8	○年齢	
				9	○村との関係	
		4	誕生	1	○産児の性別を見わける法	
				2	○産時の信仰	
				3	○行事・後産の処置	
				4	○産時の禁忌	
				5	○産養	
				6	○七夜・五十日	
				7	○命名	
				8	○トリ子	
		5	葬儀	1	○棺前後	
				2	○喪家の風習	
				3	○野送り	
				4	○屍体の保護	
				5	○童墓	
				6	○墓地	
				7	○服喪	
		6	由来不明なるしきたり			
		7	社会的訓諭の文句	1	○否定傾向のもの	
				2	○肯定傾向のもの（多くは其由来知り難き所謂言ひ習はし）	

		8	町村の交渉	1	○交際法	
				2	○確執（其記念物・歴史・境論、相手方町村に関したる悪意ある俚諺・民謡・伝説等）	
		9	衣服	1	○特殊なる衣服及び其分布	
				2	○用法（名所、きれ地・染め色等に就ての方言）	
				3	○迷信	
				4	○服制・附装飾品	
		10	食物	1	○主食物	
				2	○副食物	
				3	○食事の度数	
				4	○特殊なる食物	
				5	○菓子と飲料	
				6	○救荒植物	
				7	○形状	
				8	○毒物及び其言ひ伝へ	
				9	○製造法	
		11	住家・建築	1	○家屋の地方的構図（平面及び立面）	
				2	○各部の名称	
				3	○家屋内に於ける人物及び物の配置	
				4	○荒神・屋敷神・地神等	
				5	○迷信	
				6	○造作・調度の装飾	
				7	○屋外・門外と内部との関係	
4	階級制度	1	親方と子方と	1	○経済関係	
				2	○相互の交渉	
				3	○地方的称呼	
				4	○血縁その他の歴史的関係	
				5	○正月・盆などの行事	
				6	○嫁とり・婿とりの場合	
				7	○精神関係	
				8	○沿革制度（附）使用人	
		2	老若制度	1	○青年団体（若者組・若者組の類）の組織・職分・権能・年限・制裁・加入時の儀式・集会場等に関する一切及び『兄若衆』との交渉	
				2	○二、三男以下の生活状態・旧時と現時との状況	
				3	○老人団体・寺院を中心とする同行中・尼講等の組織・・・等	
5	口碑・民譚	1	説話者の曲調を採る個処・話のはじめ・話の終り			
		2	一郷・一族の歴史と信ぜられ来りし民譚			
		3	庶物・地物を対象とせる説明民譚			
		4	社寺・叢祠等に関する口碑			
		5	童話			
		6	巨人譚・英雄譚の地方的発達をなせるもの			
		7	古典的なる恋愛譚			
		8	性欲の民譚			
		9	ウソツキ村・馬鹿村など言はるゝ村に関したる譚の集団			
		10	国民的歴史・民譚・戯曲・童謡或は小説より拗曲したりと見ゆる地方的のもの			
6	言語・遊戯	1	方言	1	○他の地方になき特殊なる発想法	
				2	○特殊事物の名称	
				3	○日常の挨拶・応酬の言語	
				4	○動植・鉱物天然現象その他、地形をあらはす名詞	
				5	○記録せられざりし古語の遺存せるものと認むべきもの	
				6	○用例乏しき死語研究の参考資料	

		2	言語遊戯	1	○地口合・舌縺り・早口文句	
				2	○謎・地方色多き洒落	
				3	○話術家の手を経ざる小咄	
		3	遊戯	1	○童のもの―名称・方法・用器	
				2	○大人のもの―名称・方法・用器・時期	
				3	○勝負事―種類・用器・方法・組織の特殊のもの	
				4	○其由来・迷信	
				5	○神事仏事に関係ある遊戯・賭博	
7	民謡・民間芸術	1	労働謡	1	○職業によるもの	農（田植・刈上・茶摘み唄の類）
						職人（大工・石切り・土工・工女・木挽き等のもの）
						労役者（馬方・金掘り・筏師又は樵漁・舟夫などの謡ふもの）
						其他、郷党・同業の集会・宴飲に常用するもの
		2	民間声楽（原始的・非都会的・末流的なるもの）	1	○浄瑠璃系（叙事脈のもの）	義太夫浄瑠璃以前の伝統あるもの（謡曲類の古き支流の固定して有するもの、祭文・説経・金平節の類）
						義太夫以後のもの（南海道・九州に散在せる末流義太夫、瞽女・門附けの徒の間に特殊的に発達せるもの。其他）
				2	○謡ひ物系（抒情脈のもの）	
				3	○民謡よりの発達と見るべき地方的端唄・踊り唄（中央に喧伝せらるゝ類を除く）	
				4	○チョボクレ、読ミウリの徒の末と見ゆるもの	
				5	○楽器の伴はざる謡ひ物	
				6	○各宗派説教師（譬へば大谷派、真宗の使僧のする如き）の節にかゝる箇処	
				7	○ノゾキカラクリの曲調の類の日本声楽史の比較研究の資料たるべきもの	
8	童謡			1	○諷喩詩系のもの―信仰伝説	歴史の化石せる断篇―社会的知識に関するもの
				2	○遊戯の一部として謡ふもの	
				3	○分布並びに類型比較の資料	
9	舞踊及び演芸（末流的・非都会的のもの）			1	○舞踊―田楽・猿楽・曲舞の残りと見るべきもの（古風なるもの）	
				2	○競争的舞踊―カケオドリの類	
				3	○社寺の祭会に演ずる特殊なる宗教的舞踊	
				4	○祭礼に与る者の即興舞踊及びその囃し詞	
				5	○村落群舞―盆踊り、花踊り、厄神送り、大漁ヲドリ、棒ヲドリ、ウスダイコ等	
				6	○ある時期の年中行事として行ふ舞踊	
				7	○其組織・伝統的に行ふ家筋	
10	演劇			1	○即興的の喜劇（ニハカの類）と農業との関係	
				2	○神事、仏会と演劇との関係を見るべき材料（三河鳳来寺の地狂言、沖縄における神舎『カミアシヤゲ』前における風習の如き）	
				3	○役者村・芸人村（興行法組織、財政の状態、本流演劇との差異状態、特殊の劇曲、信仰・伝説・社の待遇等）	
				4	○門芝居・一人芝居を行ふ者の現状	
				5	○偶人劇	イ　該芸人の団体の調査（役者村の条応用）
						ロ　社会との関係
						ハ　信仰と芸術との間を彷徨せる偶像及び採集（オシラ神・シンメイサマの如き）
						ニ　足人形の現状
11	影絵					
12	ノゾキカラクリ					
13	巡業手工職人の余興演芸（鍛冶屋の浄瑠璃の類の、信仰より出でゝ地方演芸発生に力を添へたるものゝ調査）					